

立石は、種子島家譜に「始めて塩釜を建つ 第一は西ノ村の立石 第二は国上村の湊 或いは云う 第一大崎 尼泊 第二 久志瀬戸 竹之川なり」という記述があることから、製塩業はじまりの地の一つとされています。

記念碑は塩釜神社境内にありましたが、現在の神社は道路改良工事にともない、上方に移転されています。

また大正2年5月に書かれた塩釜伝には、建仁元年（1201）、信基（種子島氏元祖）が島内を視察中、西之村立石が製塩業に適していると考え、塩焚きの技能を持つ臣下二人を派遣して、集落民に塩焚きの技術を教えさせたとあります。さらに6代島主時充の時、製塩法や年貢法を定めるとともに、塩戸（塩焚きに携わる人）の祖先の遺業をたたえ、塩焚きの集落には薪用の山林、駄馬飼育用の牧場を与え、その年貢は塩で納めさせたとあります。

この時の製塩法は鎌倉式製塩といわれ、竹の網代（あじろ）に石灰や苦塩（にがしお）を塗って60日間位乾かしたものを鍋として使い、大きな塩焚きかまどの上のせて海水を入れ、一昼夜煮つめて作る方法でした。塩は2石5斗（450ℓ）くらいできたといわれています。

神社には、信基が鎌倉から持ってきたといわれるカメが代々伝わっていて、これは苦塩を貯蔵するものだとされています。

また、1月15日には火入れ祈祷を行っていますが、これは塩焚きかまどに火入れを行うとき、不浄を避けるために行われた厳粛な焚き初めの儀式の名残をとどめているものと考えられています。



種子島製塩初地の碑